

図書館の本棚から(一般)

2022 年 5・6 月号 亀山市立図書館

『夫婦をテーマに読んでみる・・・』というテーマ

●我が家のヒミツ

奥田 英朗／著

妻を亡くした父親と、同じく妻を一年ほど前に亡くしている息子の上司。その間に生まれた同志のような関係。そして、そこから、人々の心の内側を学んだ息子。彼らを描いた短編「手紙に乗せて」
その他全 6 編の家族の秘密に泣き笑いの 1 冊。

●妻の終活

坂井 希久子／著

定年まで勤めあげた会社で嘱託として働いている夫、まもなく 70 歳。結婚 42 年にしてほぼはじめての妻からの頼み事「病院の付き添いをしてほしい」、これをにべもなく断ってしまい・・・
末期がんで、余命 1 年を宣告された妻が、最後に夫に遺したものは・・・
別れを前にした夫婦の姿を描いた作品。

●たそがれダンサーズ

桂 望実／著

今日もスタジオに集う中年おじさんたち。男だけの社交ダンスチームのメンバーである。いろいろな人生を歩いてきた男たちが夢中になって大会での入賞にむかっていく。家族や夫婦にはそれぞれの形があり、悩みもそれぞれ。
おじさんたちに、そして、指導講師に救いは来るのだろうか？

●あなたと共に逝きましよう

村田 喜代子／著

昭和・平成の上昇期を生きてきて、老い方を知らない団塊世代の共働き夫婦。夫は会社を経営、妻は大学で教鞭をとる。その夫を襲った動脈瘤破裂の危機。
通院に民間治療、食事療法を行い、湯治に向かい・・・
ふいの病が夫婦の暮らしをどう変えたのか？



ひとやすみ つぎは新書です

●夫婦という他人

下重 暁子／著

著者は「結婚する気がなかった」というのに、つれあいの 45 年の結婚生活を経てたどり着いた夫婦というものについて書いている。
結婚してもしなくても、子供がいてもいなくても最後は一人。そんな未来を見据えた「あたらしい生き方」が語られる。
アナウンサーを経て、ベストセラー作家となった下重氏の軽快な言い回しにも注目。

●定年夫婦のトリセツ

黒川 伊保子／著

人生 100 年時代といわれる昨今、定年後に夫婦がともに家にいる時間はどうしても増えることになる。
そんな時を見据えて定年を迎えるあなたも、定年はまだまだというあなたも読んでみませんか？
「妻のトリセツ」「夫のトリセツ」もあわせてどうぞ。

